

「救いは主のものです」

(ヨナ書 1 章 1 7 節～ 2 章 9 節)

「しかし、私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえをささげ、私の誓いを果たしましょう。救いは主のものです」(2:9)

仲森文穂

今日のメッセージ要旨

○荒海に投げ込まれたヨナはもがきつつ沈み、陰府の手前まで行って、ついに主の御名を唱えました。そのヨナの祈りが 3～10 節に記されています。その祈りを見ると、ヨナは波にもまれ、もがき、苦しみつつ海の底へと沈んでいったようです。深淵に呑みこまれ、海藻が頭に絡みつくのを感じながら、深みへと沈んでいく自分を「神様の目の前から追われた」と表現しています。罪深い自分は「もう生きて神殿に詣でることもできない」と、彼は薄れゆく意識の中で思ったといひます。

○6 節に「私は山々の根元まで下り、地のかんぬきが、いつまでも私の上にあります」とあります。「地のかんぬきが、いつまでも私の上にあった」というのは、陰府の描写です。当時の人は、人は死んだら陰府に行き、神様の裁きを待つと思っていました。陰府は、海の底を境目としてその下にあると思われていました。陰府に行けば自力で出られず、祈りも神様に届かないとも信じられていました。ヨナは陰府の手前まで行き、息絶えようとする時に、主の御名を唱えたのでした。それを神様は聞き逃し給わなかったのです。まことに「救いは主のもの」なのです。

「しかし、私の神、【主】よ。あなたは私のいのちを穴から引き上げてくださいました」とあります。この「しかし」は起死回生の劇的な変化をさす「しかし」であることから、昔から「大いなるしかし」と呼ばれています。2:10 に「主は魚に命じ、ヨナを陸地に吐き出させた」とあります。ヨナは不思議な神様のお計らいにより、命を助けられ、陸に戻る事ができたのです。でも、これって思えば振り出しに戻ったということですね。神様は、信仰に立ち帰ったヨナを再び用いて、ニネベに遣わそうとされるのです。

○イエス様は人々から「天からのしるしを見せてほしい」と求められたことがあります。その時イエス様は「ヨナのしるしのほかに、しるしはない」と答えられました(マタイ 16 章)。三日間「魚の腹にいて陸に戻されたヨナのように私は三日目に復活する、それがあなたがたに与えられる天のしるしだ」ということでしょう。あるいは、民族や国家の壁をこえた神の赦しを説いた点で、イエス様とヨナ書は共通していますので、それを「天のしるしー神の国のしるし」と表現されたのかも知れません。イエス様が説かれた神の国の福音、万民の救いについて理解する上で、ヨナ書は貴重な文書となっています。「救いは主のもの」というヨナの告白を心にとどめつつ、次の 3 章へと読み進めていきたいと思います。